

「シシリー、用意はいい？」

「はい。大丈夫です」

高等魔法学院が休みのある日、俺とシシリーは連れ立ってとある場所にやって来ていた。

「おお、数か月振りなのになんか懐かしいな」

十五歳まで爺さんと暮らしていた山奥の家だ。

「そういえば、随分前にゲートの説明をした時に来て以来、ここには来た事がなかったですね」

「そういえばそうか」

なんで休日にわざわざこんなところまで来ているのかというと、別にピクニックに来た訳ではない。

「さて、懐かしいけど今日はこの家に来るのが目的じゃないからね。早速始めようか」

「は、はい！」

「じゃあ、俺が獲物を狩ってくるから、ここで待ってて」

「わ、分かりました」

今日の目的は狩り。

なので、俺が慣れた狩場の方がいいと思ってこの場所に来た。

その狩りに、なんでシシリーを同行させたかといえば、ちゃんと理由もある。

「家の裏手に、獲物を解体するための場所があるから、そこで準備してて」

それは、シシリーに動物の解体をさせる為だ。

シシリーは攻撃魔法よりも治癒魔法の方が得意で、シシリー自身もそちらの技術向上を願っている。

ならば、生物の構造を解説しながら教えた方が理解も深まると思ったのだ。

実際、俺は前世で医療になんて全く関係ない人生を送っていた。

それでも、ある程度の知識は持っていたけど、こっちにきて獲物を自分で解体するようになって、生物の構造に詳しくなったのは間違いない。

なので、シシリーにも同じ体験をもらおうという訳だ。

もつとも、初めの内は厳しいだろうけどね……。

なんせ命を奪う行為だ。

元々、治癒魔法が得意な人は、性根が優しい人が多い。

傷付いた人を助けたいと思う心に魔力が反応して治癒魔法が発動する。

当然、シシリーもそういう人間だ。

だけど、この行為が一番治癒技術を向上させることも間違いない。

この矛盾した行為を正当化するために、食材確保の為の狩りに来た。

解体するのは、食材として持って帰る為である。

「うう……緊張します……」

「まあ、初めはキツイだろうけどね。治癒魔法を向上させたいなら、絶対やっておいた方がいいから」

「わ、分かりました。頑張ります！」

「うん。それじゃあ、そろそろ行ってくるね」

シシリーの決心が鈍らない内に獲物を狩って来よう。

そう思っただけで向かって行こうとすると

「はい、行つてらっしゃい。気を付けて下さいね」

そんな風に送り出してくれた。

……やばい、なんだこの新婚感。

思わず戻って、行つてらっしゃいのチューをお願いしたかったけど、この後のことを考えると、甘い空気が邪魔になるような気がしたので泣く泣く振り返らずに狩場に行くことにした。

くそう……今度はお願いしよう。

そんな下らないことを考えつつも、さすがに十数年狩りと遊びで走り回っていた場所だ。

迷うこともなく狩場に着いた。

そして、索敵魔法を張り巡らすと、すぐ近くにそこその獲物がいた。

これは……鹿かな？

解体する生物としては、大きさも申し分ないし肉もクセが無くて美味い。

まずはコイツを狩ることにしよう。

気配を消して獲物に近付いていくと……いた。

こちらには気付かず、草を食んでいる。

さて、解体することを前提とするので、なるべく体に傷が無い方が望ましい。

とすると……一発、ヘッドショットだな。

そうと決まれば、すぐに魔力を集めて魔法を起動させる。

使うのは、以前シュトロームにも放ったことのある熱光線の魔法。

こちらの魔法の気配を感じた鹿が頭を上げた瞬間……。

右の耳から入った熱光線は、そのまま左耳に抜けていった。

その間にある脳を一瞬で破壊し、鹿はそのまま痙攣しながら息絶えた。

「……美味しく頂くから、勘弁な」

絶命した鹿に手を合わせて、肉が血生臭くならないように魔法で急速に冷やした後、異空間収納に収めた俺はそのまま家に向かった。

さて……本番はここからである。

「あれ？ シン君、もう戻って来たんですか？」

家に戻ると、シシリーが作業台の上に解体用の道具を並べているところだった。

「まあ、勝手知ったる森だからね。どこに何がいるのかとか大体分かるから」

そう言いながら異空間収納から仕留めた鹿を取り出す。

「う……ああ、鹿さん、ごめんなさい……」

食用にするとはいえ、元々の目的はシシリーの治癒魔法向上の実験体だ。

そのことに罪悪感を覚えたシシリーが、鹿に謝る。

「さて……それじゃあ、解体するよ？ その時に色々と説明するからね」

「ちょ、ちょっと待って下さい……」

早速解体を始めようとすると、シシリーから待ったがかかった。

そして何回か深呼吸をすると、決意を込めた目で俺を見てきた。

「大丈夫です。お願いします」

「よし。それじゃあ血抜きからね」

「え……？」

普通、動物を仕留めた際はすぐに血抜きをしないとイケないと言われているが、それは血が腐敗するからだ。

俺は今回、出血の状態も確認させたかったので、獲物を仕留めてすぐに魔法で冷やし、腐敗が進まないようにしていたのだ。

その鹿をフックに吊るして準備完了。

「それじゃあ……」

こうして、鹿を解体しながらの生体の構造の授業はなんとか進んでいった。

途中……。

「う……ご、ごめんなさい……」

血や内臓を見てシシリーが吐いたりしたけれど、それでも生体の構造を知って治癒魔法に活かしたいという思いや、仕留めた命を無駄にしないように、必死に解体していた。

そして。

「これで終わりだよ。大丈夫？」

「はあ、ふう……だ、大丈夫です……」

「血抜きも上手く出来たし、肉も上手く捌けたから、美味しい肉になるよ」

「良かったです。無駄にすることがなくて」

「それで、どう？ 生物の体の構造は分かった？」

「はい。お蔭様でよく分かりました」

治癒魔法を使用する上で、生物の構造を知ることとはとても有意義だ。

それを本などではなく、実践で経験できたことでシシリーの体への理解度はかなり上がったようだ。

シシリーは、解体されお店で売られているようなブロック肉になった鹿に感謝の意味も込めて手を組んでお祈りしていた。

「さて、今日のところはこれで帰ろうか。今度は別の動物でも試してみよう」

「え？」

「ん？ 当然、別の動物でもやるよ？」

「そ、そうですか……」

一回、種類だけで全てが分かるとは到底思えないし、なにより今回は初めての解体だ。

解体することに意識が集中して、気付くべきことに気付いていない可能性もある。

なので、この解体作業は何回かする予定である。

「じゃあ、片付けて帰ろう」

「はい……」

若干気落ちしているシシリーに悪いと思いつつも、これも必要なことだと割り切って次回は何の動物にしようかと考えていると。

「あ、わ、わわ」

シシリーの慌てた声が聞こえた。

声が聞こえた方を見ると、血抜きをして抜いた血が入ったタライを持ち上げようとしてバランスを崩したシシリーの姿が見えた。

「あ、危ない！」

「きゃあっ！」

咄嗟にシシリーとタライを支えようとするが、一歩及ばず、シシリーはタライごと倒れてしまった。

俺も巻き込んで。

その結果……。

「うえ……血でベトベトだ……」

「ぐ、ごめんなさい！」

二人とも、鹿の血でベトベトになってしまった。

「これは……どうしよう？」

今日着ているのは制服ではなく私服。

防汚の付与はされていないので、すぐに汚れを落とすことができない。

「あ、え、えと……そ、そうだ！　ウチに行きましょう！」

「え？　シシリーの家？」

「はい！　王都の家じゃなくて、クロードの街の方ですけど」

「ああ、温泉か」

「はい！」

服もそうだけど、とにかく体が血と脂でベトベトだ。

「それはいいな。よし、そうしよう」

「じゃあ、急いで片付けちゃいましょう」

「あ！　そんなに慌てると……」

「きゃあ！」

撒き散らした血に足を取られてシシリーが転んだりしながらも、なんとか撤収作業を終え、魔法で高温かつ高圧のスチームを発射し、血を洗い流してからクロード領にゲートを開いた。

「お、お嬢様！　シン様！　そのお姿は一体！？」

血まみれで現れた俺とシシリーを見た、クロード領の代官、カミーユさんの驚きの声だ。

そりやあな、自分のところのお嬢様が婚約者と一緒に血まみれで現れたら、どんな修羅場だ！？　とツツコミたくなるだろうな。

「ちよつと、動物の解体に失敗しちゃって……すぐにお風呂入れる？」

「そ、それはもう、いつ賢者様や導師様が来られてもいいように準備は万全に整えてありますから」

「あの……ホント、ウチのじいちゃんとかあちゃんがすみません……」

どんな頻度でここ来てるんだよあの二人！

「いえシン様。我々が賢者様と導師様のお世話をさせて頂けるなど、思いもしなかった役得で御座いますので。どうかお気になさらず」

「は、はあ」

「さあ、お二人とも温泉に入ってその血と脂を洗い流して下さいませ。お召し物はその間に洗っておきますので」

「あ、お願いします」

こうして、俺とシシリーは温泉に入った。

そして、温泉からあがった時、ある失敗を悟った。

「あ、着替えがない……」

温泉に入っている間に洗っておくとは言っていた。

だが、洗濯は洗った後に乾かさないといけないのだ。

確かばあちゃんがつった魔道具の中には、乾燥機もあったはずだけど、それでもそんなにすぐ乾くようなものではない。

ましてや、俺たちの服は血にまみれていたのだ。

洗濯自体にどれだけの時間がかかるのか……。

その結果、俺たちが温泉に入っている間に洗濯が完了しているはずもなく、脱衣所に用意されていたのは……。

「バスローブ一枚で……」

そう、それだけだったのだ。

確かに、下着とか他の人のものは着たくないし、しょうがないといえましょうがないのだけど……状況が問題なのだ。

「あ、シン君……」

男女で別れた出入口でちょうどシシリーと一緒にになった。

「シシリーもそれ……」

「あ、その……服が乾くまでにもう少し時間がかかるらしくて……」

そういうシシリーの格好は、俺と同じバスローブ姿だった。

ということは……その下は……。

恥ずかしそうに頬を染めながら上目遣いのシシリーにゴクリと生唾を吞んだ時、カミーユさんから声がかかった。

「選択が終わりましたら声をかけますので、お嬢様のお部屋でお待ちください」

「は、はい！」

カミーユさんからの思いがけない提案に、思わず返事を返したシシリー。

って、この格好で部屋に二人きり！？

マジか？ カミーユさん、一体何を考えて……って、そうか。

俺とシシリーは婚約している。

ということは、もうアレな体験はとくに済ませているであろうと、そう解釈したのではないだろうか。

そうでないと、この格好の男女二人を同じ部屋には入れないだろう。

そんな妙な納得をしつつ、俺とシシリーは部屋に入った。

クロード領の屋敷のシシリーの部屋は、本当に寝るだけの部屋ということでソファなどの座れる家具がない。

そうになると必然、ベッドに腰かけるのだが……。

バスローブ姿でベッドに二人で腰かける。

今まで経験したことのないシチュエーションに、俺の脳は沸騰寸前だ。

それはシシリーも同じだったようで、真っ赤な顔をして俯いていた。

かくいう俺は、脳内で何回もある葛藤していた。

行くのか？ 行かないのか？

その度に手を伸ばし、引つ込め、また伸ばしを繰り返し、ようやく俺は決心した。行く。

そう決心して手を伸ばした時、シシリーが勢いよく立ち上がった。

「そ、そういえば！ この部屋、本とか沢山あるんですよ！」

「そ、そうか！ それじゃあ本を読んでたらあつという間に時間が過ぎるな！」

シシリーに向かって伸ばした手が空振りに終わった俺は、何事もなかったかのように頭をかき、なんとか誤魔化した。

「はい！ 持ってきますね！」

シシリーはそう言うと、自分がバスローブだけの姿だということを忘れているかのような勢いで本棚に向かっていった。

そして、本棚からいくつかの本を抱えて戻って来た時。

俺は見てしまった。

シシリーの胸元が大きくはだけていることに。

さっき慌てて動いたからだと思われるが、シシリーは気付いていない。

見てはいけないと頭では分かっているが、視線はシシリーの胸元に釘付けた。

そして、その俺の視線に気付いたのだろう、シシリーが自分の胸を見て一瞬で真っ赤に茹で上がった。

「あ！ ちがっ！ ワザとじゃないんです！」

そう言って胸元を隠そうとするが、シシリーはさっきまで手に本を持っていた。

勢いよく胸を隠したため、その手に持っていた本は宙を舞い、俺の方へ飛んできた。

「あ！ ダメ！」

「シシ……むぐ！」

「きゃあ！」

シシリーは、俺の方に放り投げてしまった本を慌ててキャッチしようと手を伸ばしてきた。

だが、そんな咄嗟の行動で正確な行動など出来る筈もなく……。

「いたた……あれ？ シン君？」

「むうう……」

「え？」

俺はシシリーに押し倒され、その胸に俺の顔は埋もれていた。

「ご、ごめんなさ……え？」

「……」

俺を押し倒してしまったシシリーは、謝りつつ俺の上からどうしようとしたが、さっきの決心が空振りに終わった俺は、思わずシシリーを逃がさないように抱き締めてしまった。

「シ、シンく……きやつ！」

さっきの決心と、シシリーの胸の感触と直に感じた体温と匂い。

それで俺の脳はやられてしまった。

抱き締められて困惑しているシシリーと体位を入れ替え、そのままベッドに押し倒した。

「シ、シン君……」

「シシリー……」

もう、お違いのバスローブは十分はだけている。

ほんの少し、バスローブをずらせばお互いの生まれたままの姿を晒すことになる。

そして、その後は……。

突如訪れたこのシチュエーションに、俺もシシリーも頭が沸騰したんだろう。

シシリーの顔は真っ赤で、でも潤んだ眼を逸らさずにジッと俺を見つめている。

その顔がたまらなく綺麗に見えた俺は、顔を近付けていく。

すると、徐々に閉じていくシシリーの瞳。

これはもう……そう思っただけでシシリーの唇に俺の唇が重なりそうになったその時。

「失礼します。お召し物の御用意が整いました」

ドアをノックする音と、ドア越しに告げる声で俺とシシリーは一気に体を離れた。

「わ、わかりました！ す、すぐ行きます！」

シシリーは、使用人さんに不審がられないように、すぐに大きい声を出して返事をした。

こうして、寸前のところで行為を邪魔されてしまった俺達。

お互いの顔を見て、恥ずかしさのあまり二人で照れ笑いをしてしまった。

「じゃ、じゃあ、服替えて帰ろうか」

「はい、そうですね」

お互いのはだけたバスローブを直し、ドアを開けたその時。

俺は地獄がこの世にあることを知った。

「アンタ達……」

「ほっほ。なんじゃ、こんなところで」

「ば、ばあちゃん！ じいちゃん！」

そう、そこには、今日もクロード領の屋敷に温泉に入りに来ていた二人の姿があった。別に、この屋敷で二人に会うことは何も問題ない。

そのシチュエーションが問題なのだ。

部屋に二人きり。

バスローブ姿。

二人とも上気して真っ赤。

ここから導き出される答えは？

「何が治癒魔法の練習さね！ そんな嘘吐いてまでやりたいのかい！？」

「ち、ちがつ……」

「はあり、こんな嘘を吐く子に育てた覚えはないんだけどねえ。なんて情けない！」

「だからあつ！ 違うんだってばあ！！」

その後、カミーユさんの証言まで引つ張りだしてようやくばあちゃんの誤解は解けた。温泉から上がって部屋から出てくるまでの時間を証言してもらったのである。

それも最初は……。

「シン。アンタ、そんなに早い……」

「何言ってるんだばあちゃん！！」

中々信じてもらえなかった。

っていうか……身内がそんな感想持つんじゃねえよ！

(おわり)